

# いま地域医療は

自治医科大学卒業生  
からの現地レポート  
NO. 297

## 「見て」「聞いて」「感じる」 ことと「愛」の大切さ

新潟県 聖籠町国民健康保険診療所 丸山 貴広

聖籠町は新潟市の北側に接し、日本海に面した平野にあります。町の面積は、東京の山手線に囲まれた土地の約半分です。町には水田やぶどう、さくらんぼ等の果樹畑が広がり、四季の変化を視覚と味覚で楽しむことができます。人口は約一万四千人で微増しており、町民の平均年齢は四十二歳と県下で一番若い町です。

私は卒業十年目の平成十八年から、卒業生として初めてとなる県内の公的診療所勤務が聖籠町で始まりました。診療所の運営、学校医・産業医の業務、町の医療政策への助言などが主な仕事です。町民生活に大きく影響する医療政策に関わりを持つことは、今までの病院勤務とは違う責任の重さを感じています。

ところで、着任して早々に行ったことの一つに、診療所の全職員（現

在、看護師五名、事務四名）を対象にした救命救急の講習会があります。医療現場では、患者さんの様態がいつ急変するか予測できません。どんな場面でも、全職員が落ち着いて対処できるように、年に一回講習会を続けています。講習会では、AEDの使用を含めた基本的な心肺蘇生の実習と、実際の現場を想定した演習を行っています。

その救命救急の大切な手技の一つに「呼吸の確認」があります。この手技には、「見て」「聞いて」「感じる」という三つのキーワードがあります。胸の動きを「見て」、相手の口元に自分の耳を近づけて呼吸音を「聞いて」、吐息を「感じる」ことで、呼吸の有無を確認します。この三つのキーワードは、心肺蘇生の現場に限って使われる言葉とと思っていました。

ところが、日常診療でも「見て」「聞いて」「感じる」は重要であることに、診療所の看護師のリーダーである松田さんとの雑談から気付かされました。「先生、患者さんと接する時に大切なことは、患者さんの体や心の様子を『見る』こと、患者さんがどんな背景で悩みを持って受診したのか話を『聞く』こと、そして患者さんに対して自分がどう行動するかを考える（『感じる』）ことだと私は考えています。呼吸の確認と同じですね。」なるほどーと思いました。日常診療の現場では、ややもすると客観的な検査データや事前に得た情報のみに目が向いてしまいます。しかし、検査データはあくまでも参考資料であり、実際に患者さんを見て、話を聞いて、感じたことを基本に診療を行うことで、先入観に惑わされずに診断することができます。

医療に限らず、どんな職業においても現場を見ずに、他人が調べたデータのみを根拠に方針を立てると、現状と合わない方針になり、誤った判断を下す危険があります。現場の状況を「見て」、現場にいる人の話を「聞いて」、自分が「感じる」とことで、はじめて集計されたデータが生かされ、現状に合った方針を打ち立てることができます。

しかし、方針が現状に合っていないも、職員の協力なしでは、よい成果

を出すことはできません。診療所の運営も同様であり、多くの人の協力が得られなければ、スムーズな運営は困難になります。人の協力を得るためには、相手を信じる「愛」の精神が必要です。「愛」の精神とは、人を深く思いやり、その人の存在を大切に思うことです。新潟県は今年のNHK大河ドラマ「天地人」の舞台です。その主人公の直江兼統は、「愛」の精神の重要さに気付いた武将であり、兜の前立てに「愛」という一文字を掲げていました。「愛」の精神は、多くの人と一緒に仕事をする際に、時代を超えて重要な思いであると考えます。

「愛」の精神を常に持ち続け、多くの人と交流し、「見て」「聞いて」「感じる」診療を行うことが、自分の目指す地域医療であると考えています。

